

令和7年度活動報告書

団体名	NPO 法人 Plus One Happiness
-----	---------------------------

1. 団体の活動内容

- ・ 障害者総合支援法および児童福祉法に基づく障害福祉サービス
基幹相談支援センター、相談支援事業所、共同生活援助
- ・ 法に基づかない障害福祉サービス（ボランティア事業）
おもちゃ図書館、ダウン症児の赤ちゃん体操教室、ユニバーサルビーチ、
ユニバーサルシネマ、ユニバーサルシネマ、ユニバーサルツアー、いちご狩り

2. 令和7年度の活動内容と成果

- ・ 法に基づく障害福祉サービス
滞りなくできた。また、社会福祉施設等整備補助金を用いて新たな共同生活住居を建築。8年度より事業開始する。
- ・ ボランティア事業
釜石では初となるユニバーサルビーチを開催。参加者からの満足度は100%であった。他、映画上映会といちご狩りも好評であり、マスコミからの取材もあった。

3. 令和8年度の活動内容

- ・ 共同生活住居の拡充に伴い、職員も増員。さらに地域の障害福祉サービスに寄与する。
- ・ ボランティア事業も継続し、特にビーチとシネマは定期開催化していきたい。
そのほか、好評であったいちご狩りの継続、7年度にトライアル開催したツアーにも8年度も取り組みたい。

4. 活動写真



一緒に海遊び かなった

「ユニバーサルビーチ」釜石・根浜海岸で地元NPO

難病児家族の願い受け

釜石市鶴住町の根浜海岸で9日、障害者がサポートを受けて海を楽しむ「釜石ユニバーサルビーチプロジェクト」が初めて行われた。地元認定NPO法人プラス・ワン・ハピネス(横沢友樹理事長)が「一緒に海遊びしたい」という当事者家族の願いを受けて企画。晴天の下で参加者が海水浴を楽しみ、海岸に大勢の笑みが広がった。



ライフセーバーや須磨ユニバーサルビーチプロジェクトスタッフのサポートを受けて海遊びを楽しむ佐々木彩風ちゃん(中央)

医師、救助員らサポート

障害者とその家族の市内外6組が参加。海に入ることができない車いすを準備し、砂浜には車いすでも移動できるようなビーチマットが敷かれた。NPO法人須磨ユニバーサルビーチプロジェクト(神戸市、木戸俊介理事長)のスタッフ7人、医師や看護師、救急救命士、ライフセーバー、ボランティアスタッフら約40人態勢でサポートした。

企画は、釜石市甲子町の佐々木江利さん(45)の、心臓に難病を患う次女彩風ちゃん(4)との海遊びを障害を理由に諦めたくないとの願いから始まった。この日、彩風ちゃんは胸ほどまで海に入った。ユニコン形の大きな浮輪に乗って移動したり、約1時間楽しんだ。



車いすでも移動できるよう砂浜にはビーチマットが敷かれた

イベントは昨年開催予定だったが、台風5号の影響で中止となり、1年越しの開催。事故がないよう、事前に参加者に綿密なヒアリングを行うなど準備を進め、当日を迎えた。

ノウハウを伝え、全面的に協力した同プロジェクトの秋田大介副理事長(49)は「釜石はライフセーバーとの連携もしっかりしていた。(障害者が)根浜に行けば海に入れると思ってもらえる場所になればいい」と望んだ。

横沢理事長(44)は「参加者はもちろん、スタッフにも楽しいと言ってもらえて良かった。須磨の協力もあり、スムーズにできた。継続開催し、自分たちの力でできるようにしていきたい」と今後を見据える。

(三浦隆博)

車いすで漁船クルーズを満喫する押川菜さん（中央）と家族



海の楽しみ分かち合う

観光地域づくり法人かまいしDMMC

障害児とその家族向けの海業体験プログラム「ゆったり楽しむユニバーサルツアー」は2、3の両日、釜石市の根浜シーサイドなどで行われた。同市の観光地域づくり法人かまいしDMMC（河東英宣代表取締役）が中心となり、ハンディのある人も安心して過ごせる空間を整備。今回の結果を踏まえ、持続可能な取り組みにつなげる。

2024年度から始まった県の海業推進モデル事業の一環で、同市では初開催。県内から4組の家族が参加した。1泊2日の日程で、大槌湾内を巡るツアーや活魚へのタッチ体験、バーベキューなどで交流した。

全盲で肢体不自由と知的障害がある押川菜さん（盛岡視覚支援学校高等部2年）は家族3人と漁船クルーズを初めて体験。スタッフが専用のラダーを用いて車いすでの乗船をサポートした。

特徴的な断崖や灯台付近を巡る約1時間の船旅。景色は見られなくても、船の傾きや海鳥の

障害者向けにクルーズ 県モデル事業 継続目指す

声、エンジンの音を体全体で感じ取った押川菜さん。終了後は母泉さん（50）の手をぎゅゅと握りしめ、鼻歌交じりにほほは笑んだ。生まれつきの障害で、家族旅行や外食は限られた場所に行けなかったという押川菜さん一家。泉さんは「家族でツアーを体験できたことがうれしい。障害で外出を諦めている家族が楽しめる場所が増えればいい」と願った。

企画運営を担った同法人は乗船方法をシミュレーションし、動画を撮影。事前に参加者に内容を示して不安を和らげた。地元認定NPO法人プラス・ワン・ハピネスに助言を仰ぎ、障害者の受け入れ環境を整えた。今回は県の事業として実施したが、27年からは自立を目指す。根浜シーサイドの佐藤奏子施設マネジャー（47）は「地域一体で大きな一歩を踏み出した。資金面など課題はあるが、持続可能な形を探りたい」と先を見据えた。

（前川佑宇）